

yomi - 12 M/K  
24 f.m. 15  
111!  
↑

→ p. 54

antar-jyotir  
y. bh. g. 1  
7. 24

- されることが多い。四・三・七―八では、アトマンは「生命諸機能のうちで、認識機能から成るプルシャであり、心臓の中では内側に光を持つもの」と定義され、「生まれつつある、(すなわち)肉体に到達・合一(再生)しつつある時」諸悪と結び付き、死に際して肉体から抜け出て行く時に、諸悪(死の諸形態)を置き去りにするといわれる。
- (2) 生体の活動時には諸器官・諸機能に向向しているプルシャが、下降しながら、順次合一収束して、本来のプルシャアトマンの姿になっていくことを言うのである。
- (3) 次生での再生に際して「降りて行く」母胎は、それ自身、認識機能を備えた別の存在である。認識機能を備えたアトマン(輪廻の主体)は、第四節に述べられるように、地上へ再生する前に、上方の世界で良い生活を享受する。
- (4) 本章一の三・六・一ガールギーとの論争を参照せよ。
- (5) この語法は、色々な見解を挙げた後、話者がいつその確信を置いている考え(本音)を切り出すのに用いられることが多い。
- (6) 例えば、本章一のシャーカーリヤのプルシャ説(三・九・二六)を参照。
- (7) 「恐れのないこと、無畏」。直前の「恐れず」とはアクセントを異にする。王が渴望していたことは結局、安心、心の平安であったかと思われる。最初に収められた対話の出だし(四・一)の構成とともに、「沙門果経」の仏陀とアジャータシートル王との対話を想起させる。



るところに宿泊所を建てさせていた。(四・一・一)

さて、夜に雁たちが(その宿泊所の上を)飛びよぎった。その時、ある雁がある雁に次のように声をかけた、「おいおい、ちよつと、バツラークシヤ、バツラークシヤ、ジャーナシウルティ・パウトラヤナの昼間に等しい輝きが広がっている。それを(我々に)にくつつけるなよ。それが君を火傷させないようにしろ。」(一・二)

この「雁」に別のが答えた、「それはいったい誰の<sup>ト</sup>まを、君、<sup>当人はこんなふう(長い)ものに、</sup>そういうからは、一つ軛に繋がったライクヴァのように言うのかね。」人がどんなふうなら、一つ軛に繋がったライクヴァなんだい。(一・三)

「勝ち取られたクリタに他の下位の手(テヤ)が集まって行くように、何であれ人々が行なう正しいことはその人に集まって行くのだ。彼が知っている事柄を知っている人、その人のことを僕はこう言ったのだ。」(一・四)

それをジャーナシウルティ・パウトラヤナが耳にした。彼は身を起こすのもどかしく、料理長官に言った、「おい君、『……』一つ軛に繋がったライクヴァのように言うのかね」と(言つ)たら、人がどんなふうなら、一つ軛に繋がったライクヴァなんだい」と(言つた)よなあ。(一・五)

「勝ち取られたクリタに他の下位の手(アヤ)が集まって行くように、何であれ人々が行なう正しい(功い)ことはその人に集まって行くのだ。彼が知っている事柄を知っている人、その人のことを僕はこう言ったのだ」(だとさ)。(一・六)

その料理長官は(ライクヴァを)捜し求めたのち、「見つかりませんでした」と戻つ(て来)た。彼

に(王は)言った、「君、婆羅門(学者)を探す、そういうところなら、その人に行き当たれるぞ。」  
(一・七)

彼は、荷車の下で皮膚病を搔いている男の脇にしゃがみ込んだ。「君がさて、貴兄、一つ軛に繋がったライクヴァだね」と彼に声をかけた。「私がそうだ、きみい」と認めた。その料理長官は「見つけましたぞ」と戻つ(て来)た。(一・八)

すると、ジャーナシュルティ・パウトラヤナは、——牛六百頭、金の飾り、騾馬に牽かせた車——、それを(全て)携えて、「そこへ」出向いた。彼に声をかけた、(二・一)

「ライクヴァよ、ここに牛六百頭、ここに金の飾り、ここに騾馬に牽かせた車がある(これらを与える)。君が崇めている神格、その神格を私に教え示せ。」(二・二)

彼に相手は答えた、「嘲笑(アハハー)あれ、おまえ下人(シュードラ)よ、君自身の牛たちともども君に。」すると、もう一度ジャーナシュルティ・パウトラヤナは、——牛千頭、金の飾り、騾馬に牽かせた車、(自分の)娘——、それを(全て)携えて、「そこへ」出向いた。(二・三)

彼に声をかけた、「ライクヴァよ、ここに牛千頭、ここに金の飾り、ここに騾馬に牽かせた車、ここに(君の)妻、ここに君が(今)座つてゐる村がある(これらを与える)。私を、貴兄、教え諭せ。」  
(二・四)

(ライクヴァは)その女の顔を持ち上げて自分に近づけながら言った、「(彼は)こんなに(牛たちを)持つてきたぞ。シュードラよ、この顔だけで君は(私を)なびかせられたろうに。」(ライクヴァが)彼(ジャーナシュルティ)のために住んだのは、このライクヴァの翼(またはバルナ樹)という名の、

マハーヴリシヤの人々の中にある地方（人々）である。彼に（ライクヴァは）言った、（二・五）

「風は実にまきあげる者である。火が消え去る時には、（火は）風の中に入るのである。太陽が沈む時には、（太陽は）風の中に入る。月が沈む時には、（月は）風の中に入る。（三・一）

水が乾き上がる時には、（水は）風の中に入る。風がこれら全てをまきあげるのだから。以上が神格についてである。（三・二）

次に自己については、氣息は実にまきあげる者である。人が眠る時、ほかならぬ氣息の中にことば（言語機能）は入る。氣息の中に視覚は。氣息の中に聴覚は。氣息の中に思考機能は。氣息がこれら全てをまきあげるのだから」と。（三・三）

（三・四）  
そのようなこの両者は実にまきあげる者である。風こそが神々の中で、氣息が生体諸機能の中で。

さて、シャウナカ・カーペーヤとアビプラターリン・カークシャセーニとが給仕を受けている最中に、二人に学生（プラフマチャーリン）が食を乞うた。だが二人は彼に与えなかった。（三・五）

彼（学生）は言った、

「偉大な自己（アートルマン）を持つ四つの者たちを、唯一の神が

——それは誰か？——飲み込んだ、世界の守護者として。

その者を、カーペーヤよ、死すべきものたちは目にしない。

アビプラターリンよ、それは多様に存しているのに。

この食物がそのためにあるのに、その者にこの食物は与えられなかったわけだ。」（三・六）

これが本当の答<sup>2</sup>、

↑

すると、シャウナカ・カーペーヤが反論しながら応じた、

「神々の自己（アートマン）、生き物たちの生みの父、

黄金の牙をもち、噛み砕く、息の主人、

人々はその偉大さを偉大であるという、

彼が自らは食べられることなく、食物ならざる食物を食べる時<sup>1</sup>。

というわけで、我々は、学生よ、これ（食べられてしまうもの）を崇めていないのだ。（君たち）施物  
を与えろ」と。（三・七）

すると「彼らは」彼（学生）に（食を）施した。

かくしてこれらは、一方に五つ、他方に五つ、十となるが、それはクリタである<sup>12</sup>。それ故、全  
ての方角において、まさしく食物は十、（だから）クリタである<sup>13</sup>。食物を食べるのはまさにこのウイ  
ラ<sup>14</sup>である。それ（ウイラジ）によってこの全て（全世界）は見られる。人がこのように知る時、  
この全てはその人によって見られたものとなり、「その人は」食物を食べるものとなる。（三・八）

（1）王名。ジャンシュルタ（ひとに聞こえた、有名な）の子、プトラ「息子」の末裔。ジャイミ  
ニーヤ派の文献や他のプラーフmanaに知られるマハーウリシャの王かつ学者の家系名を基に、子供  
っぽい、無邪気な人を暗示する名を創作したものか。

（2）「幸運をもたらす目をもった」。群れを先導する雁にふさわしい名（「目効きさん」であること  
もに、賭博における「目」（本書第一章5参照）の意味（「つきのよい男」）が懸けられている。  
（3）王の徳と、その宿泊所の給食炊き出しの火とが盛んな様を懸けていう。

- (4) 「取り込み屋」ほどの意味の賭博用語と一般に解釈されている。「蓮托生のライクヴァ」という訳が考えられるかもしれない。
- (5) レークウ「後に残された(足跡)」からの派生による人名であるが、ライヒ・クヴァ「財産はどこだ、財産はどうなった？」の意味が懸けられていると解釈できる。賭博での特殊な意味もあったかもしれない。
- (6) クリタは四で割り切れる、賭博で最も強い手(本書第一章5参照)。四に三、二、一の他の手が集合して合計十になることを言い、これが結論部に出るヴィラージと関係している。注12参照。
- (7) 抽象的な表現を、雁は、ライクヴァの知っている事は王が既に知っていることなのだが、という意味で用い、王は、ライクヴァの持っている知識を得れば賭博で勝てる、と思いきんだのである。
- (8) 料理長官は賭博場かばくち打ちのいる場所を探したのであろう。
- (9) 王は賭事に勝つための、つきのよい神格を教えてくれと言っているのである。
- (10) ライクヴァの教えの中に述べられている、火、太陽、月、水を取り込む風(小宇宙では、言語機能、視覚、聴覚、思考機能を取り込む氣息にあたる)を念頭においた謎かけ。学生が乞う食物も、結局は風 $\parallel$ 氣息の神が食べるのだというのである。
- (11) 男性形からブラジャーパティと考えられる。学生は「それは誰か」と言ってしまったが、「誰」にあたる語は同時にブラジャーパティをも意味することから、この答によってシャウナカが問答に勝ったものと思われる。
- (12) 注10に挙げた計十者。クリタは四(またはその倍数)であるが、一から四までの和は十であることから(注6参照)十と同置される。

(13) 十という数を十方(四方とその中間の「四維」とに上下を加えたもの)における食物に結び付けクリタと等置する。

(14) 「輝きわたる」あるいは「広く(または、分かれて)支配する」を原義とする女性原理。繁殖力、娘を嫁がせることによる勢力拡大などが想像されるが、実体は不明。本書第一章6のプルシヤ讃歌五をも参照せよ。ヴィラージは十の数(特に韻律に関連して)、食物、生殖との関係が深く、例えば「ジャイミニーヤ・プラーフマナ」三・四二ではこれらの同置が確立したものと述べている。背景には、 $1+2+3+4=10$ (4までの自然数の和)のような計算法・知識があったものと思われる。



## 翻訳箇所一覧

- 第1章  
1 R̥gveda, I, 32.  
2 R̥gveda, IV, 18.  
3 R̥gveda, V, 85.  
4 R̥gveda, VII, 88.  
5 R̥gveda, X, 34.  
6 R̥gveda, X, 90.
- 第2章 S  
1 Maitrayāṇīyasmhitā, I, 6, 12  
(p. 106, ll. 7-11).  
2 Kāṭhaka-samhitā, X, 5  
(p. 130, ll. 2-7).  
3 Kāṭhaka-samhitā, X, 6  
(p. 130, ll. 8-17).  
4 Jaiminiya-brāhmaṇa, I, 358.
- 第3章  
1 Bṛhadāraṇyaka-upaniṣad, III, 1, 1-9, 26.  
2 Bṛhadāraṇyaka-upaniṣad, IV, 4, 1-25.  
3 Chāndogya-upaniṣad, IV, 1, 1-3, 8.
- 第4章  
[1]  
1 Rāmāyaṇa, I, 48, 9-33.  
2 Rāmāyaṇa, I, 49, 1-22.  
3 Rāmāyaṇa, I, 66, 1-26.  
4 Rāmāyaṇa, I, 67, 1-27.
- [2]  
1 Mahābhārata, I, 54, 1-24.  
2 Mahābhārata, I, 55, 1-43.  
3 Mahābhārata, I, 56, 1-33.
- 第5章  
1 Padma-purāṇa, śṣṭīkhaṇḍa 36, 88 cd-143.  
2 Kūrma-purāṇa, 2, 31.  
3 Liṅga-purāṇa, I, 106.
- 第6章  
1 Chāndogya-upaniṣad, 6, 1, 1-6, 7, 6.  
2 Sāṃkhyatattvakaumudī, ad 20-21.  
3 Sāṃkhyatattvakaumudī, ad 3.  
4 Sāṃkhyatattvakaumudī, ad 10-11.  
5 Brahmasūtrabhāṣya, ad 1. 1. 5.
- 第7章  
1 Śarapatha-brāhmaṇa, 10, 6, 3, 1-2.  
Chāndogya-upaniṣad, 3, 14, 1-4.  
2 Chāndogya-upaniṣad, 6, 8, 1-7; 6, 12, 1-13, 3.  
3 Bṛhadāraṇyaka-upaniṣad, 1, 4, 10.  
4 Bṛhadāraṇyaka-upaniṣad, 3, 1, 1-2; 7, 1-23.  
5 Bṛhadāraṇyaka-upaniṣad, 4, 4, 22.  
6 Bṛhadāraṇyaka-upaniṣad, 4, 5, 1-15.  
7 Upadeśa-sāhasrī, prose 2, 45-54; 62-71.
- 第8章  
1 Chāndogya-upaniṣad, 5, 3, 1-10, 10.  
2 Bṛhadāraṇyaka-upaniṣad, 4, 4, 3-7.  
3 Brahmasūtrabhāṣya, ad 2. 1. 35.  
4 Brahmasūtrabhāṣya, ad 2. 1. 32-34.
- 第9章  
Mālinīvijayottara-tantra, 8, 1-80.
- 第10章  
1 Nāṭya-śāstra, 6 (Baroda ed., pp. 312-316).  
2 Mṛcchakatikā, I.  
3 (1) Kumārasambhava, 8, 1-20.  
(2) Raghuvamśa, 19, 4-6; 9-13; 34-39; 41-57.  
4 Mudrārāksasa, III.  
5 (1) Pañcatantra, 4, 7 (Bombay ed., pp. 14-19).  
(2) Pañcatantra, 4, 11 (Bombay ed., pp. 27-29).  
(3) Kathāsartīśgara (Vetālapañcaviṃśikā), (Bombay ed., pp. 413-414).  
(4) Bṛhatkathamanjari, (Bombay ed., pp. 104-105).
- 第11章  
1 Manusmṛti, II, 26; 29; 30; 34-37; 69-71; 108; 140-42; 145; 173; 176-84; 191-201;  
211-7; 225-9; 233; 234; 241-5.  
2 Kauṭīliya-Arthśāstra, 1, 2, 1-12; 3, 1-17; 4, 1-16; 5, 1-17.  
3 (1) Kāmasūtra, 1, 2, 1-38.  
(2) Kāmasūtra, 1, 4, 1; 5-35.
- 第12章  
[1]  
1 Bṛhatsamhitā, 5, 1-18.  
2 Bṛhatsamhitā, 73, 1-20.
- [2]  
1 Carakasamhitā, 3, 2, 1-19.  
2 Carakasamhitā, 5, 2, 1-23.
- 第13章  
1 Bṛhatsamhitā, 52, 42-50; 55-56; 51-54; 67-68; 2-3; 61-62.  
2 Matricasamhitā, 10, 1.  
3 Pādmāsamhitā, 3, 4 b-25; 6, 1-43; 30, 48-63; 64-68.  
Mayamata, 23, 2-5; 45 b-32; 9, 57-63; 64-70a; 86; 10, 77-86a.

小倉 泰 (おぐら・やすし) 第13章、付章

1959年 茨城に生まれる

1982年 東京大学法学部卒

1989年 東京大学大学院博士課程 (比較文学比較文化) 単位取得退学  
現在 東京大学東洋文化研究所助手

論文に「南インドのヒンドラー寺院の象徴性(1)、(2)」「(東洋文化研究所紀要) 111、115)、「タミル・ナードゥにおける王権と寺院」(『東洋文化研究所紀要』118)、「中世都市ウイジャヤナガル」(『東洋文化』72)、「南インドピンドラー彫刻のプロローション」(『東洋文化』73) など。

上村勝彦 (かみむら・かつひこ) 第4、10、11章

1944年 東京に生まれる

1967年 東京大学文学部卒

1970年 東京大学大学院印度哲学科修了  
現在 東京大学東洋文化研究所教授

著書に「屍鬼二十五話」(平凡社)、「ボンチヤタントラ」(大日本絵画)、「インド神話」(東京書籍)、「インドの詩人」(春秋社)、「カウテイヤ実利論」(岩波文庫)、「バガワット・ギーター」(岩波文庫) など。

後藤敏文 (ごとう・としふみ) 第1、2、3章

1948年 東京に生まれる

1972年 早稲田大学第一文学部卒

1975年 京都大学大学院修士課程 (印度哲学史) 修了  
1981年 京都大学大学院修士課程 (梵語学梵文学) 単位取得退学  
1985年 エフランゲン大学 Dr. phil.  
現在 大阪大学文学部助教授

著書に *Die "I. Prätentive" im Vedischen / Untersuchung der wichtigsten thematischen Wurzelsystemen Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften*, 論文に "Ai. unangef. und Verwandtes" (*Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 39), "Altindisch rādhaz- und urdig. \*lendr" (*Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 44), "Materialien zu einer Liste altindischer Verbalformen" (『国立民族学博物館研究報告』15-4) など。

高島 淳 (たかしま・じゅん) 第9章

1955年 徳島に生まれる

1977年 東京大学教養学部卒

1988年 東京大学大学院博士課程 (宗教学) 単位取得退学  
現在 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授

訳書に S. N. ダヌグワタ「ヨーガとヒンドラー神秘主義」(セリカ書房)、論文に「タントリズム」(岩波講座「東洋思想」6)、「タントリズムにおけることばの呪力」(岩波講座「東洋思想」7)、「Dikṣā in the Tantraloka」(『東洋文化研究所紀要』119)、「初期シヴァ教僧院 (matha) の歴史—8—13世紀」(『南アジア研究』1) など。

宮元啓一 (みやもと・けいいち) 第6、7、8章

1948年 東京に生まれる

1970年 東京大学文学部卒

1975年 東京大学大学院博士課程 (印度哲学印度文学) 中退  
現在 国学院大学助教授

著書に「日本奇僧伝」(東京書籍)、訳書に H. ツインロー「インド・アト [神話と象徴]」(セリカ書房)、論文に "Artha according to the Nāiryīkas and Vaiśeṣikas" (*Alta Asia* 57)、「初期ツインロー学派におけるアトマンの運動」(『国学院雑誌』92-11) など。

矢野道雄 (やの・みちお) 第12章

1944年 京都に生まれる

1967年 京都大学文学部卒

1972年 京都大学大学院博士課程 (梵語学) 単位取得退学  
現在 京都産業大学国際言語科学研究科教授

著書に「インド天文学・数学集」(朝日出版社)、「インド医学概論—チヤラカ・サンヒター第1巻」(朝日出版社)、「密教占星術—宿曜道とインド占星術」(東京美術)、「占星術師たちのインド—暦と占いの文化」(中公新書) など。

横地優子 (よこち・ゆうこ) 第5章

1984年 東京大学文学部卒

1990年 東京大学大学院博士課程 (印度哲学印度文学) 中退  
現在 東京大学文学部印度語印度文学科助手

論文に「Devīhātmya における戦闘女神の成立」(『東洋文化』73)、「Aṅdhaka 神話における自己増殖モチーフ」(『前田尊学博士還暦記念論集・〈我〉の思想』春秋社)、「The Originality of Devīhātmya: Demonstration in the Episode of the Appearance of Kauṣiki」(*Journal of Indian and Buddhist Studies* 37-2) など。

インドの夢・インドの愛—サンスクリット・アンソロジー—

初刷発行

一九九四年二月一〇日

編者

上村勝彦・宮元啓一

発行者

神田 明

発行所

株式会社 春秋社

東京都千代田区外神田二一八一六 千加  
電話 (〇三) 三五五一九六一 (営業)  
(〇三) 三五五一九六一四 (編集)  
振替 東京八二四八六一

装丁

清水良洋

印刷

新興印刷製本株式会社

製本

株式会社 徳住製本所

ISBN 4-393-13269-6 Printed in Japan  
定価はカバー裏に表かしてあります